

「場所」／「記憶」／「物語」

柴田 剛*

“Place” / “Memories” / “Narrative”

キーワード：場所，記憶，物語，解釈共同体

1. はじめに

近年、歴史学などの分野で、「記憶」／「場所」（あるいは「場」）の関係を意識した研究や成果が多く発表される様になっている¹⁾。日本におけるこうした議論の定着は、おそらくピエール・ノラの「記憶の場」にまつわる議論の日本への紹介、あるいは抄訳という形で一部の論考のみではあるが、「記憶の場」のプロジェクトに寄せられた論考の翻訳・出版²⁾による部分が大きいだろう。しかしながら、こうした状況は「記憶」という問題系が突然浮上して来たということではなく、1970年代の日本へのアナル学派の紹介において「集合心性」という問題系がすでに取り上げられており、そうした土台の上に「記憶」／「場所」の関係をどの様に考えるのか、という問題系が「発見（再発見？）」された、ということが言える様に思われる。また、こうした「記憶」という問題系が浮上して来た背景には、おそらく、「歴史物語（ナラティブ）論」や「オーラル・ヒストリー」などを通して、「証言」や「歴史修正主義」の問題がクローズアップされている様な状況とも無関係ではないだろう。そうした状況を踏まえた上で、当節においては、筆者の関心に関わり、かつ目に付いた範囲に限定されるが、「記憶」や「物語」、「場所」という問題系に対する先学のアプローチを概観してみたい。

ところで、この様な「記憶」という問題系に対する関心は歴史学だけのものではない。哲学の立場からは、ポール・リクールが4部に及ぶ大著『時間と物語』（原著1983-1985）において「歴史」がどの様に「物語られるのか」（あるいは「記述されるのか」）を考察し、さらにその後、アナル学派による「社会史」やノラの「記憶の場」プロジェクト、現象学などの成果をにらみつつ、『歴史・記憶・忘却』（原著2000）において、「忘却」の問題も含み込む形で「歴史」／「記憶」の関わりについて考察を行っている。こうしたリクールの問題意識に先駆けるものとして、フーコーが『狂気の歴史』（原著1961）や『言葉と物』（原著1966）、『監獄の誕生』（原著1975）などで展開した「言説」や「エピステーマー」といった問題系を挙げることが出来よう。

また、特に「記憶」／「場所」の関係に関して言えば、（「記憶」という用語を使用しているか否かは別として）従来から地理学や文化人類学などの研究分野が関心をいだいて来た。地理学ではイーファ・トゥアンやエドワード・レルフなどの人文主義地理学者が「場所」と人間の認識の在り方や意味付けなどの関係を論じて来た。また、歴史地理学においても「歴史」／「場所」の関係について論じられて来たが、歴史地理学は具体的な場所の歴史（あるいは「記憶」）を探って来た、という点において「記憶の場」の議論の先駆をなして来たと言えよう（米家、

* 大阪市立大学院生

2005)。

文化人類学においても共同体という「場」と「口頭伝承」による「語り」の関係について論じた成果が見られる。特に、川田順造(原著 1976)は西アフリカのモン族を事例に、文字を持たない社会集団が口頭伝承の語りの中で自分達の「歴史」をどの様に語り継いで来たのか、を考察している。そういう意味で川田の研究は、まさに「記憶の場」という問題系の先駆的な研究成果であると言えよう。また、山口昌男(原著 1975, など)も「歴史」を考える際に「記憶」の問題を導入することの重要性を指摘している。こうした、文化人類学の立場から「歴史」を捉える、ということに対する関心は決して一過性のものではなく、2004年には『民族学研究』誌上で「人類学の歴史研究の再検討」という特集が組まれている。さらに、オーストラリア北東部のアボリジニのコミュニティにおける口承による「歴史」の実践を記述した保莉(2004)、西アフリカのニジェール川沿いに居住する「ボゾ」と呼ばれる民族集団の「語り」の実践を記述した竹沢(2008)などの成果もこうした川田(や山口)の問題意識に関わるものであろう。柳田國男などによる日本の民俗学も、柳田の民俗学への構想それ自体が(試みが成功したかどうかは別に)「口頭伝承」を重視して、「常民」が本来持っていた(と仮定される)生活の在り方を再構成しようという意図を持っていた³⁾という点では、ノラの「記憶の場」の議論とリンクする部分があると思われる。

以下、「場所」をめぐる「記憶」あるいは「物語」の問題について先学の成果を援用しつつ、ささやかではあるが、考察を行なってみよう。

2. 「記憶」／「物語」

歴史研究において、「記憶」という用語がキーコンセプトとして頻繁に使用され始めるのは、おそらく1980年代以降のことであるが、ある人間集団における集合的な「記憶」という認識の在り方の嚆矢はロベール・エルトツやエミール・デュルケム、レヴィ＝ブリュルなどの「集合(集団)表象」、あるいはアルヴァックスの「集合的記憶」といったフランスの社

会学者達に求めることが出来よう。岩崎(2000)によれば、アルヴァックスはあらゆる「記憶」は常に集合的な記憶であり、特定の間主観的な社会的格子の変化に伴って常に変わって行くものとみなしており、彼のこうした視点は国民国家の成立や統合強化というコンテキストにおいて、そこに作動するメカニズムを「構成されたもの」として無効化、あるいは相対化する試みの出発点になっているという。ノラの「記憶の場」のプロジェクトもこうした「集合的記憶」という視点の系譜上に位置付けられるという。また、こうした「集合的記憶」という問題系に関して、前近代や近代の生の空間における集合的記憶の連続性／断絶に着目するアナル学派の「心性史」の成果との脈絡も視野に入れる必要がある様に思われる。なお、ここで注意しておきたいのは、ノラは「記憶」の装置を口頭伝承などの非文字的な装置に限定せず、文書などの文字メディア、あるいは記念碑などの物理的な景観までを含みこむ様々なレベルを想定しており、オーラル・ヒストリー的な「歴史」の表象のみを問題としている訳ではない。ただ、ノラのプロジェクトにしても、アナル学派にしても、「集合的記憶」が主な関心となっており、そうした「歴史」の「集合表象」に対する「個人」からの応答をどの様に考えるのか、という問題が残される様に思われる。この点について、岩崎(2000)は、ジョン＝ボードナーを引用しつつ、そうした「集合的記憶」／「個人」の間の交渉・せめぎ合いを考える装置としての「パブリックメモリー」に言及している。

さて、上述の様に、「歴史」を論じるに際して「記憶」という問題系がクローズアップされるようになって来たことは、「歴史」をアプリアリに存在する「事実」ではなく、ある種の「物語」として捉える「歴史物語(ナラティブ)論」の議論がさかんになって来たこととも無関係ではないだろう。野家啓一(2005)は、柳田國男などを援用しつつ、「語る」という行為が個人や知識、伝聞などを共同化し、他人と共有する為になされることを指摘する。そして、「歴史」が「語る」という行為を媒介することによって構成される「物語」であるとし、その際、「物語」としての「歴史」は、「歴史」それ自体として独立に存在するのではなく、特定のコンテキストの中で構

成されるものであるという。こうしたことから考えると、個人レベルでの「記憶」もそれ自体として存在するのではなく、ある特定のコンテキストの中で想起されるものであると思われる。なお、「物語」や「記憶」をめぐる「表象不可能性」／「分有」の問題や「証言」にまつわる「暴力」の問題については岡真里（2000）の議論が参考になるであろう。

3. 「記憶の場」あるいは「解釈共同体」としての「場所」

ノラ（2000）によれば、「記憶の場」とは、「根底から変容し、革新されつつある共同体が、技巧と意志とをもって、生み出し、作り上げ、宣言し、また維持するものである」という。また、ノラによれば、こうした「記憶の場」は物質的・空間的な意味だけではなく、象徴的、機能的な意味を持ち、ナショナルからローカルに至るまでの様々なスケールの具体的な空間に対応するものであるという。すでに触れた様に、人文主義地理学においては「場所」とそれをめぐる意味や価値観、象徴体系などに関心が払われて来た。しかしながら、人文主義地理学においては「場所」／「人間」の関係を本質的なものとしてみなしていたきらいがある。遠城（1998）によれば、「場所」は①社会的な構築物であり、②「場所」は我々の社会生活における様々な活動を可能にすると同時に規制しており、物質的かつ意味的な個性を持っている、という。さらに、「（想像の）共同体」と対比しつつ「場所」という用語を用いることによって個人の身体から国民国家に至るまでの様々なスケールの場を論じることが可能であることを指摘する。いずれにしても、こうした「場所」の考え方は、ノラの「記憶の場」という議論とリンクする様に思われるし、さらに広げれば、近年文化人類学の立場から議論されている「社会空間論」の視点も、こうした「記憶の場」の議論にリンクするものと思われる⁴⁾。

繰り返しになるが、上述した様な「記憶」の議論や「歴史物語（ナラティブ）論」によって、「歴史」がアプリアリな存在ではなく、「記憶」や「語り」などによって構築されたものであるという認識がされ

るようになって来ているが、その様な「物語」や「記憶」を「語る」主体、及び「解釈」を行なう存在をどの様に考えるべきなのであろうか。「歴史」を「記憶」や「物語」によって構築される「テキスト」であると考えれば、「語り」の主体は「作者」、「解釈」を行なう存在を「読者」とみなすことが出来よう。この場合、「読者」は単独でテキストの解釈を行なう訳ではなく、ある特定のコンテキストの下で、テキストの解釈を行なうことになる。この様な「読者」によるテキストの「解釈」を規制するコンテキストを、スタンリー・フィッシュ（1992）は「解釈共同体」⁵⁾と名付け、「解釈共同体」というコンテキストの内部でテキストの「解釈」を行なう「読者」を「素養ある読者」と位置付ける。こうした考え方を「記憶の場」の議論に援用するならば、「記憶」が「テキスト」であり、「場」が「解釈共同体」であるということが出来るだろう⁶⁾。この場合、「場所」は物質的・空間的な意味での「場」を生成する装置であるということが言えよう。また、「素養ある読者」は「場」のコンテキスト内で「記憶」や「物語」（＝テキスト）を解釈する人々であり、「場」のスケールや「記憶」や「物語」の主体によって様々なタイプの「読者」が想定出来よう。マクロなレベルでは「国民国家」を維持する為に「記憶」を語る人々が考えられるであろうし、非常にミクロなレベルではある特定の地域で日常生活を行なう人々（「生活者」）やある施設を利用する人達のグループ、といった存在が考え得る。なお、フィッシュ自身は「解釈共同体」を静態的なものとして考えている様である⁷⁾為、「解釈共同体」の考え方を「記憶の場」の議論に援用する為には、「解釈共同体」をそれぞれ固定的に独立したのではなく、それぞれの「解釈共同体」が重なりを持ち得る緩やかな「解釈」の規制要因（コンテキスト）として読み替えるなど、批判的に受容する必要があると思われる⁸⁾。

4. 「記憶」／「物語」を成立させるもの

上で述べていることを再び繰り返す形になるが、「歴史」は「語る」という行為を媒介することによって構成される「物語」であり、「物語」としての「歴

史」は、「歴史」それ自体としてアブリアリに独立して存在するのではなく、特定のコンテキストの中で構成されるものである(野家, 2005)。そうした、「物語」に関わる個人の「記憶」もそれ自体が独立して存在するのではなく、ある特定のコンテキストの中で想起されるものである、と言えよう。その様な視点から、前節では「歴史」を「記憶」や「物語」によって構築される「テキスト」として捉え、「語り」の主体を「作者」、「解釈」を行なう存在を「読者」とみなした。この様な「テキスト」に対して、「読者」は単独に「テキスト」の「解釈」を行なう訳ではなく、ある特定のコンテキストの下で「テキスト」の「解釈」を行なうことになる。そうした、「読者」による「テキスト」の「解釈」を規制するコンテキストが「解釈共同体」(フィッシュ)である。前節で述べた様に、「記憶の場」においては「記憶」を「テキスト」、「場」を「解釈共同体」として捉え得る。

さて、次に、「記憶」／「物語」がどのような要件によって「記憶であること」あるいは「物語であること」を認められるのか、ということを考えてみたい。前述の様に、「記憶」や「物語」はそれ自体で「記憶」や「物語」として存在するのではなく、あるコンテキストの中で構成されるものである。同様に、「テキスト」もそれ自体で何らかの意味を持った「テキスト」として存在する訳ではない。「解釈共同体」というコンテキスト内で「解釈」されることによって、意味を持った「テキスト」として生成されるのである。つまり、「テキスト」は「素養ある読者」によって「解釈」されることによって、意味のある「テキスト」として生成され、承認される、ということが出来るだろう。こうした観点から「記憶の場」をみると、「記憶の場」において、「記憶」は「記憶」それ自体として存在する訳ではなく、「場」のコンテキスト内で「(素養ある)読者」による「解釈」がなされることによって、何らかの意味をもつものとして承認されるのである。この様なフィッシュの視点の援用は、リクールが「われわれは小説の読者であるのにおとらず、歴史の読者でもある。歴史記述を含む、どんな記述も拡大された読解理論に属する」(2004, p.334)と述べていることとも関わる様に思われる。いずれにしても、「記憶」や「物語」という「テキスト」はそれ自体では意味を持った「テク

スト」としては存在し得ず、ある特定の「解釈共同体」(＝「場」)において「素養ある読者」によって「解釈」がなされることによって意味を持つ「テキスト」が生成、承認されるというプロセスを、「記憶」／「物語」の成立要件として考えることが可能な様に思われる。なお、前節で述べたことを踏まえて付言するならば、「解釈共同体」としての「場」は物質的・空間的なものであるか概念的なものであるかに関わらず、可変的でそれぞれの「解釈共同体」が重なりを持ち得るものであり、様々なスケールや圏域を想定し得るものである。

5. 「記憶」／「物語」の了解可能性／不可能性

ここでは、前節までの考察を受ける形で、「解釈共同体」と外部者の関係について考えて見たい。「解釈共同体」の概念を動的なものとして、批判的に受容するにしても、スケールや圏域を問わず、ある一定の広がりを持つ(持ち得る)以上、常に「解釈共同体」の内部に存在する者と外部に存在する者が出て来る。「解釈共同体」の内部に存在する者は、「解釈」のコンテキストを共有した「素養ある読者」ということになるが、「解釈共同体」の外部に存在する者は、「解釈共同体」としての「場」、あるいは「テキスト」の生成装置としての「場所」におらず、「解釈」の規範やコードを共有していないという意味で、フィッシュの言い方にならば「素養なき読者」として位置付けることが出来る。この様な外部者としての「素養なき読者」も、内部者としての「素養ある読者」と同様に様々なタイプの「読者」が想定出来よう。日常生活において、その「解釈共同体」に関わりのない生活をしている人達が該当するだろう。さて、いずれにしても「素養なき読者」としての外部者にとって、「解釈」のコードやコンテキストが共有されていないことに伴って、ある「場」における「記憶」や「物語」に対する「わからなさ」、すなわち「了解不可能性」の問題が出て来よう。こうした「了解不可能性」がつかまとう「解釈」の帰結として、「誤読」という結果も生まれ得る⁹⁾。「誤読」にも様々なレベルを想定可能であろう。「テキスト」の「誤読」のレベルが極限にある場合、別々の「解釈

共同体」間における「解釈」の共有の可能性がない可能性もあるし、逆に「誤読」のレベルが低ければ、異なった「解釈共同体」間での「解釈」の共有可能性もあり得る。いずれにしても、「解釈共同体」／外部者（あるいは異なった「解釈共同体」の成員同士）の関係においては、常に「了解不可能性」（あるいは「誤読」）の問題が付きまとう可能性は否定出来ない。こうした視点を空間的な意味での「場」の議論に関わらせるとすれば、「了解不可能性」（あるいは「誤読」）のせめぎ合いの空間的な表出が（様々なスケールにおける）「場（場所）」をめぐるポリティクスの一局面であるということは言えるのかも知れない¹⁰。

6. 「記憶」／「物語」の内部化／外部化

最後に、「解釈共同体」としての「記憶の場」に関わって、「記憶」／「物語」の「語られ方」について少し考えてみたい。前述している様に、「解釈共同体」としての「記憶の場」における「記憶」／「物語」は「素養ある読者」による「解釈」を通じて意味のある「テキスト」として生成されるが、「記憶」／「物語」を呈示する段階で、「語り」の志向性が大きく分けてふたつに分けられるのではないだろうか。かなり乱暴な言い方になるが、「解釈共同体」の内部を志向する「語り」と「解釈共同体」の外部を志向する「語り」に区分することが出来る様に考えている。「解釈共同体」の内部を志向する「語り」は「解釈共同体」の拡大を志向せず、「解釈共同体」の性格によっては、「語り」が内向的、極端な場合は「秘儀化」する場合もあり得るだろう。この場合、「解釈共同体」内の「素養ある読者」に共有される「解釈」は、「開かれた」ものではなく、外部者にとっての「了解可能性」は低いものとなるだろう。逆に、後者の「解釈共同体」の外部を志向する「語り」は、「解釈共同体」の拡大、あるいは「素養ある読者」の「増員」を志向する方向性を持ち得る「語り」である。この場合、「解釈共同体」内の「素養ある読者」に共有される「解釈」は外部者に対する「了解不可能性」を出来得る限り抑えた「開かれた」ものを志向することになるだろう。そういう意味でおそらくは、「記憶」／「物語」の外部化の志向は、ハイデン（2002）の

言う「場所の力」、あるいはそれに伴う「公共の記憶」という問題系とも関わる様に思われる。

なお、ここで注意したいのは、「記憶」／「物語」の内部化／外部化という「語り」の志向性と、「解釈共同体」としての「場（場所）」の地理的スケールに相関関係がある訳ではない、ということである。ミクロな地理的スケールに展開する「解釈共同体」が外部を志向する「語り」を行なうことはあり得るし、また、逆に、マクロな地理的スケールに展開する「解釈共同体」が内部を志向する（あるいは「秘儀的」な）「語り」を行なうこともおおいにあり得るのである。

7. 終わりに

ささやかな小論ではあるが、本稿においては、「場所」／「記憶」／「物語」という問題系について、どの様に考えることが出来るのか、先学の研究成果を援用しつつ、考察を行なった。出来得る限り、理念的な考察を目指したが、どの程度達成出来たのか、正直な所、心許ない部分が多く、また、考察出来なかった問題も残っている。「場所」／「記憶」／「物語」の関係についての理論的な考察は重要な課題であると考えており、今後も考え続けて行きたいと思っている。

さらに、筆者の関心に関して言えば、「解釈共同体」／外部者の関係に関わる「了解不可能性」（「わからなさ」）の問題についての考察は、「解釈共同体」の外部者としての調査者（研究者）のポジショナリティに関わるものであると考えており、今後、この点についても考察して行きたいと考えている。

付記

本稿は、2008年度人文地理学会大会において「場所」をめぐる生活者の「記憶」／「物語」というタイトルで提出した予稿を改題し、修正と加筆を行なったものである。ささやかな小論ではありますが、この小論の発表に際して、日頃ご指導頂いている水内俊雄先生をはじめとする大阪市立大学地理学教室の先生方、院生諸氏、学会発表に関わっ

てコメントなどを頂いた方々に感謝の意を表します。

注

- 1) 何らかの形で「記憶」に言及している歴史学的な視点に基づく近年の研究成果は、筆者の手許にあるものをランダムに挙げるだけでも井竿 (2002)、清水 (2002)、福本 (2004)、三宅 (志垣) (2004)、高橋 (2005)、高橋 (2006)、…などがあるが、これらは「記憶」という問題系から「歴史」にアプローチした成果のごく一部分であり、実見出来なかったものを含めて非常に多くの成果が発表されている。また、探索漏れの研究成果も多くあると思われる。さらに、歴史学以外でも、文化人類学、地理学、民俗学、社会学、哲学…など多くの分野で「記憶」や「物語」に関わる研究成果が発表されており、「記憶」に関する研究成果を完全に把握するのは不可能な様に思われる。
- 2) ピエール・ノラ編、谷川稔訳 (2002)。
なお、この翻訳の出版に先行して『思想』911号 (2000) において「歴史と記憶」という特集が生まれ、ノラらによる「記憶の場」のプロジェクトの紹介、翻訳が行なわれている。
- 3) 例えば、柳田は次の様に述べている。
「我々は民間即ち有識階級の外に於て (もしくは彼等の有識ぶらざる境涯に於て)、文字以外の力によつて保留せられて居る従来の活き方、又は働き方考へ方を、弘く人生を学び知る手段として観察して見たいのである。さうして其方法が果して成り立つか否かを、何よりも前に突きとめて見たいのである。」
(柳田、『民間伝承論』、p.22)
- 4) 例えば、西井編 (2006)、など。
- 5) フィッシュ自身は次の様に述べている。
「解釈共同体は解釈戦略を共有する人々から成っている。テキストを読む (在来の意味で) ための戦略でなく、テキストを書くための、つまり、テキストの特性を構成しテキストに意図を付与するための戦略を共有する人々から成っている。」
(フィッシュ、訳者解説の訳者 (小林) による引用部分、p.186)
なお、フィッシュ (1992) の邦訳については、全3巻で企画されているが、現在の所、第3巻のみ刊行されている。そうした事情の為、「解釈共同体」などの概念の定義や捉え方に関わる部分が含まれた巻が邦訳テキストとして刊行されておらず、該当部分の引用を訳者解説から行なった。以下、注7についても同様。
- 6) この様な「解釈共同体」という概念を「記憶の場」の問題系と関連付ける捉え方については、金田 (2007) に着想を得た。
- 7) 「……異なる読者たちのあいだに解釈の安定性のあるこ

とが説明されるし (彼らは同一共同体に属するのだ)、ひとりの読者が異なる解釈戦略を用いて異なるテキストを生むときに規則性が存在することが説明される (彼は異なる共同体に属するのである)。それはまた、なぜ見解の相違が存在し、なぜ秩序だったしかたで論争することができるのかをも説明する。テキストに安定性があるからではなく、解釈共同体の組成に安定性があり、共同体内部にできる対立にも安定性があるからである。」

- (フィッシュ、訳者解説の訳者 (小林) による引用部分、p.187)
- 8) なお、この様な捉え方をすることについては、伊藤 (1996) による文芸批評理論における「読者論」の解説 (特にフィッシュに関する部分) を参考にした。
 - 9) 「誤読」に対して「正しい解釈 (読み)」を対置し得るが、「正しさ」も「素養ある読者」による「解釈」の結果として生成されるものと考えられよう。
 - 10) おそらく、非常にミクロなレベルであれば家庭内のいざござなどが挙げられるであろうし、逆に非常にマクロなレベルであれば国家を超えたスケールで展開される戦争や侵攻などが挙げられよう。トドロフ (1983) によるスペインの新大陸征服の過程に関する分析も、こうした「了解不可能性」の問題に関わるものだろう。

参考文献

- 井竿富雄 (2002) 「歴史を書くのは誰か?—個人の記憶と国家の歴史—」, 山口県立大学国際文化学部紀要第8号, pp13-20.
- 石川登 (2004) 「歴史のなかのグローバリゼーション—ポルネオ北部の植民地期と現代にみる労働のかたち—」 (《特集》人類学の歴史研究の再検討), 文化人類学第69巻3号, pp412-436.
- 伊藤直哉 (1996) 「読者の誕生 読者とは何者か?」, 土田知則・神郡悦子・伊藤直哉『現代文学理論 テキスト・読み・世界』, 新曜社, pp124-131.
- 岩崎稔 (2000) 「記憶」, 『現代思想のキーワード』現代思想臨時増刊, 青土社, pp14-17.
- 岩本通弥 (2003) 「方法としての記憶—民俗学におけるその位相と可能性」, 岩本通弥編『現代民俗誌の地平3 記憶』, 朝倉書店, pp1-13.
- 大杉高司 (2004) 「ある不完全性の歴史—20世紀キューバにおける精神と物質の時間—」 (《特集》人類学の歴史研究の再検討), 文化人類学第69巻3号, pp437-459.
- 太田好信 (2008) 『亡霊としての歴史』, 人文書院.
- 岡真里 (2000) 『記憶/物語』, 岩波書店.
- 遠城明雄 (1998) 「「場所」をめぐる意味と力」, 荒山正彦・大城直樹編『空間から場所へ—地理学的想像力の探求』, 古今書院, pp226-236.

- 春日直樹 (2004) 「いまなぜ歴史か—序にかえて—」(《特集》人類学の歴史研究の再検討), 文化人類学第 69 巻 3 号, pp373-385.
- 金田淳子 (2007) 「マンガ同人誌 解釈共同体のポリテクス」, 吉見俊哉編『文化の社会学』, 有斐閣, pp163-190.
- 川田順造 (1990) 『無文字社会の歴史』, 岩波同時代ライブラリー (原著 1976).
- 川田順造 (1992) 『口頭伝承論』全 2 巻, 平凡社ライブラリー.
- 米家泰作 (2005) 「歴史と場所—過去認識の歴史地理学—」, 史林第 88 巻 1 号, pp126-158.
- 清水正義 (2002) 「記憶と歴史学についての断章」, 白鷗法学第 20 号, pp47 - 65.
- 杉島敬志 (2004) 「現在を理解するための歴史研究—東インドネシア・中部フローレスの事例研究—」(《特集》人類学の歴史研究の再検討), 文化人類学第 69 巻 3 号, pp386-411.
- 高橋進 (2005) 「記憶と歴史学—ファシズム, レジスタンス, 戦争犯罪—」, 龍谷法学 38 巻 3 号, pp157-177.
- 高橋秀寿 (2006) 「記憶と空間—西ドイツにおける『故郷(ハイマート)』の変遷—」, 関学西洋史論集(関西学院大学) 29 号, pp15-26.
- 竹沢尚一郎 (2008) 『サバンナの河の民—記憶と語りのエスノグラフィー』, 世界思想社.
- 谷川稔 (2000) 「社会史の万華鏡—『記憶の場』の読み方—読まれ方—」, 思想第 911 号, 岩波書店, pp5-12.
- トドロフ, ツペタン/及川毅, 大谷尚文, 菊池良夫訳(1986) 『他者の記号学—アメリカ大陸の征服』, 法政大学出版局 (原著 1982) .
- 西井涼子, 田辺繁治編 (2006) 『社会空間の人類学—マテリアリティ・主体・モダニティー』, 世界思想社.
- 二宮宏之 (1995) 『全体を見る眼と歴史家たち』, 平凡社ライブラリー.
- 野家啓一 (2005) 『物語の哲学』, 岩波現代文庫.
- ノラ, ピエール/谷川稔訳 (2000) 「記憶と歴史のはざまに」, 思想第 911 号, 岩波書店, pp13-37.
- ノラ, ピエール編/谷川稔訳 (2002) 『記憶の場』全 3 巻, 岩波書店.
- ハイデン, ドロレス/後藤春彦ほか訳 (2003) 『場所の力—パブリック・ヒストリーとしての都市景観—』, 学芸出版社.
- フーコー, ミシェル/田村淑訳 (1966) 『狂気の歴史—古典主義時代における—』, 新潮社 (原著 1961).
- フーコー, ミシェル/渡辺一民・佐々木明訳 (1974) 『言葉と物—人文科学の考古学—』, 新潮社 (原著 1966).
- フーコー, ミシェル/田村淑訳 (1977) 『監獄の誕生—監視と処罰—』, 新潮社 (原著 1975).
- フィッシュ, スタンリー/小林昌夫訳 (1992) 『このクラスにテキストはありますか?—解釈共同体の権威 3—』, みすず書房.
- 福本明子 (2004) 「原爆ピアスを巡る集団の記憶の検証—集団の記憶のリテラシーを求めて」, Human Communication Studies Vol.32, pp19-44.
- 保莉実 (2004) 『ラディカル・オーラル・ヒストリー—オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践—』, 御茶の水書房.
- 三宅(志柿) 禎子 (2004) 「ポストコロニアル・フェミニズムとナショナリズム: プエルトリコ女性たちの辿った歴史, 経験の記憶」, 岩手県立大学社会福祉学部紀要第 6 巻第 2 号, pp81-88.
- 柳田國男 (1986) 『民間伝承論』, 第三書館.
- 矢野敬一ほか (2005) 『浮遊する「記憶」』, 青弓社.
- 山口昌男 (1986) 『道化的世界』, ちくま文庫 (原著 1975).
- 山口昌男 (1997) 「歴史と記憶—記憶という視点から歴史を切る—」, 国際研究(中部大学) No.13, pp191-212.
- 山口昌男 (2004) 『知の遠近法』, 岩波現代文庫.
- リクール, ポール/久米博訳 (2004) 『時間と物語』全 3 巻, 新曜社 (原著 1983-1985).
- リクール, ポール/久米博訳 (2004-2005) 『記憶・歴史・忘却』全 2 巻 (原著 2000).
- レーヴィット, カール/熊野純彦訳 (2008) 『共同存在の現象学』, 岩波文庫.

